

承認	会長	書記	書記	事務局長

議事録

第4回常任理事会（教育長との懇談会）を開催しましたのでその内容を報告致します。

平成31年1月21日

松阪市自治会連合会 事務局

日時	平成31年1月17日（木） 10:30～12:00	場所	松阪市市民活動センター 会議室
参加者	小山、山本、瀧本、中西、三室、朽木、池田、若山、以上8名 教育委員会：中田教育長、松名瀬局長、伊藤、青木、有瀧、萬濃、野田 以上7名 企画振興部1名、事務局2名		
<p>◎司会進行・・・事務局：西岡</p> <p>I. 会長挨拶・・・小山利郎</p> <p>II. 教育長挨拶・・・中田雅喜</p> <p>III. 自己紹介・・・資料による</p> <p>IV. 懇談</p> <p>1. コミュニティ・スクールについて</p> <p>萬濃学校支援課長： 別紙資料「松阪市のコミュニティ・スクール（昨年度作成）」に沿って説明。 「学校評議員」は学校運営に対して意見を言っていただく機関。「コミュニティ・スクール（＝CS）」は意見をいただくだけでなく、一定の権限・責任を持ち、学校運営に携わっていただく。 学校は地域の将来を担う大事な子どもたちを預かっている。地域が持つ「教育力」をお借りして、子どもたちを育てていく。その中で郷土に対する愛着・誇りが育っていきと考えている。 地域と一緒にあって特色ある学校づくりができる。 小～中学校の9年間かけて地域の子を育てるという意味合いで、中学校区単位で小中連携型CSの導入を推進。</p> <p>池田会長： CSの導入は強制？地域の学校が決める事？</p> <p>萬濃学校支援課長： 法の改正があり、ある意味教育委員会が一方向的に指定できるようになったが、松阪市は地域と学校がしっかりと協議をした上でCSをやっていききたいという思いを大切にしたい。地域・学校が協議→教育委員会に申し出→CSに認定する。強制ではない。</p> <p>中田教育長： 地域・学校の思いが基盤にないと上手くいかない。丁寧に順序を守ってCSを作っており、携われる職員も限られているので、全ての学校に対応できない。「地域と一緒に作っていききたい」という学校については、精一杯支援していききたい。CSを選択せずとも、学校の特色を活かせばそれで良い。</p>			

池田会長：

東黒部地区はどうなっているのか？

萬濃学校支援課長：

朝見小、てい水小が設置に向けて研究している。東部中校区で広がっているので、ぜひとも検討いただければ・・・。

池田会長：

東黒部小と地域は十分にコミュニケーションが取れていると思っている。人口が少なくなる中で小学生は貴重。地域の行事には、小学生も参加し一体となっている。大きくなってできるだけ地域に残ってもらおうよう話をしている。

中田教育長：

東黒部は名前は無いが、まさにCS。そこに少し機能を入れたり、具体的にカリキュラムを入れたり・・・。

県外に出ていく大学生が多い。若者を地域に戻すひとつの手段として、行政・教育が一緒になり、県外に出ている大学3年生の親御さんに対し、松阪市の企業に関する資料を送付する取組みを行おうとしている。

山本会長：

地域と触れ合う事により子どもの地域性・人間性は高まる事になるが、先生がそちらばかり力を入れ、本来の学力の方が疎かになるのではないか？CS導入の目標値を平成30年度30%と設定してあるが、100%ありきでないと思ってよいのか？

萬濃学校支援課長：

CSを学校・保護者・地域がそれぞれの役割を考える中で、学校はしっかり授業を進めていく事が大事である。CSの中で学力について、しっかり説明をさせていただく。学力も当然CSの大きな柱である。瀧本会長が香肌小・宮前小・飯高中CSの会長ですので・・・。

瀧本会長：

3つの学校が今までやってきた事に、負担にならずプラスしてやっていける事があつたら、応援していこうというスタンス。なので、CSに学校が振り回されて学力や学習指導に影響が出る事はない。むしろ、学校だけでは対応できない地域学習に地域が応援し、中身が充実している。学校便り等での広報により、徐々にCSが地域住民に浸透、肯定的な意見が圧倒的。

小山会長：

先生にプレッシャーがかかる事はないという事だ。先生は今でも大変なのに、これ以上大変になったら、その事が一番心配であった。

池田会長：

CSのメリットは？CSは強制的ではない、地域独自でやっていくのであれば、それで良いという事ですね？

萬濃学校支援課長：

今まで地域と学校とで取り組んできた事が、校長先生が変わった事により途絶える事があるが、CSというシステムに入ると、継続されていく事がメリット。(東黒部は)今でも十分に協力していただいている。

中田教育長：

CSには、学校と地域を繋ぐコーディネーターが入るというメリットがある。子どもたちの学力は全国平均を下回った6年前から向上している。地域の中で一緒にやっていく事が、学力向上するための大きな力になっている。市長と全ての小学校を回った中で、CSを導入して良かった、学校が落ち着いたとの意見があつた。落ち着きが学力に結び付き、それを活用して地域学習がある。良い方向に向かっている。

若山会長：

大江中問題で1年半以上協議を重ねた結果思う事は、学校なくして地域はもたない、地域なくして学校がもたないという事。この春からCS導入について話し合う予定。もし大江

中がなくなった場合、「統合」という話ではない、子どもたちがバラバラになってしまう。小中が一緒になって考えていかなければならない。小中連携型CSは正しいと思う。今のやり方では学校は守れないが、CSは学校を守る力になると思う。

中田教育長：

大江中は小さい学校でありながら、県内でも学力・スポーツともに優秀な学校であり、地域もしっかり協力している。行政もしっかり応援をして、残そうとしているが、クラスの半分は「NO」、学ぼうとしている子どもたちの親御さんが「NO」と言う。この現実は見つめなければいけない。原因は何なのか？生徒数が減り、子どもたちの学びが保障できなくなった時は、「再編活性化」を視野に入れる必要があるが、大江中のように一定の人数がありながら、優秀な学校でありながら、そこに通える子どもたち・親が、なぜ「NO」と言うのか。「学校が」「子どもたちが」という主語で、次長を中心にいろんな方に働きかけをしている。数合わせの理論で統廃合の話をするつもりは一切ない。子どもたちが「大江中で学んでよかった」と思えるようにしたい。その方法の一つがCS。大江中を選ばない現実がある事を地域でもしっかり認識していただく。この議論がいろんな問題の元になっている。これが上手くいくように行政は、どれだけでも協力する。

山本会長：

CSの導入は地域からの声で始まるのか。学校側からの声で始まるのか。

萬濃学校支援課長：

どちらもある。CSを導入して子どもたち、地域が元気になった事例が白川村。飯高も白川村の例を参考にして実践されている。

2. 教職員の働き方とクラブ指導について

有瀧学校教育課長：

昨年7月に起きた大阪の地震を受けて、各小中学校の通学路におけるブロック塀点検に関するお礼とお詫び。これに関するデータは教育委員会・安全対策課・建設保全課で共有。各学校においては「安全マップ」の中に加え、有事の際に近づかないよう子どもたちに指導するのに役立てるよう指導。

「働き方改革」「ブラック企業」という言葉が飛び交う昨今であるが、教師の長時間労働についても大きな問題になっており、昨年、文部科学省において「学校における働き方改革の提言」がなされた。教師個人だけでは改善できないので、国・県・市の教育委員会も勤務時間縮減をしなければならないという提言。

松阪市も取組みを始めたところ。

教師の一日について、実態を説明。

資料1「松阪市中学校活動指針」に沿った説明。(国・県のガイドラインに沿って昨年12月に作成。)

指針が出て実践するのは難しいが、出来る限り改善を進めて、子どもたちの教材研究、授業の質を高める方向に進めていきたい。

中西会長：

スポーツの世界で名をはせようとした場合、個人、先生、学校が相当量の時間をつぎ込まないと無理である。有名な選手は一分一秒を惜しんで練習している。どこで線を引いたらよいか難しい。

生徒数が不足し成立しないクラブはどうしたらよいか？

有瀧学校教育課長：

部活動で高校進学を考えてとしている生徒もいるので、クラブ内でも意見が分かれる。やり過ぎてスポーツ障害になる事も社会問題になっているので、公教育として一定の線引きをしなくていけないのが現実。

教育長もクラブ活動をしっかりされてきた方なので、ガイドラインに反対であったが、日本全体でこのガイドラインに沿う流れ。好きなだけやれば良いという現状ではない。決め

られた範囲で子どもたちの技術向上に努める。

中田教育長：

少子化により2校合同クラブを作り中体連に参加するケースもある。小さい頃から始めている子は学校の部活動以外で活動する生徒もいる。

学校でのクラブは、ルールを守る、みんなで夢を追いかけるため努力する事に大きい意味がある。学校にとって、クラブは大切な位置付けであるが、先生にも休んでもらう、効率的にできる方法を模索している。

専門外の先生も多く、松阪市では「エキスパート」として13名の地域の方に協力いただき、クラブ指導をお願いしている。

山本会長：

以前はクラブ活動の他にキャンプなどで親睦を深めていたが、今はクラブ活動以外の事は求めず、強いクラブの学校に入る傾向がある。また、今の中学生は必ずクラブに入る必要はないのか？

中田教育長：

放課後の生徒の活動の幅が多種多様になってきており、以前のように強制加入にしてしまうと幽霊部員が増える事になり、強制加入させない学校が増えてきた。

3. その他

朽木会長：

少子化が進み、小学校に空教室ができてくる。また、都会に出て地域から離れてしまう子どもが増えている。例えば空教室を活用して高齢者施設に入ってもらい、小学生の頃から老人と触れ合う機会を作れば、高齢化社会を支える気持ちを持つ子が増えるのではないかな。

中田教育長：

市長と全小学校を回った中で、地域のご意見をいただいた。具現化していく事がいくつかある。「どうか地域に若者を残してほしい。」との声が出た。大学生を地域に戻す方法として、松阪の会社案内を親御さんに送る事になった。協力を得るため松阪市内を含め、松阪より南の高校に出向き、協力を願い出た。人が地域にいるという事は、子どもの数も増え、働くところもあり、地域が活性化する。

複合化について。鎌中に公民館が入る。子どもたちが公民館活動をやっている中に入っていく。第一小に公民館が入っている。来年度より飯高中・香肌小・宮前小・天白小（天白公民館の図書館機能を小学校に移設、司書も配置）で「開かれた図書館」という事で、地域の人が松阪図書館に行かずに学校図書館を利用、経由して本を借りる事ができる。学校だけではなく複合的な要素も必要。積極的に進めていきたいと思う。

三室会長：

私は教員であったが、最近の先生は大変真面目であるが、そこが心配である。

中田教育長：

以前に比べ、自主的に勉強会など参加するが減っている事に憂いはあるが、真面目で細かい気配りができる若い先生に期待している、育てていきたいと思っている。どうかご協力を。

V. お礼の挨拶・・・小山利郎

※懇談会終了後、役員で明日行われる、松阪市の住民自治のあり方検討会に係る二者合同会議にむけて、資料等について話し合った。

以上